

聖書：コリント人への手紙第一 14：13～19

説教題：五つのことばを

日時：2022年12月18日（朝拝）

コリント教会の礼拝における異言の問題について見ています。異言について 14 章 2 節にこうありました。「異言で語る人は、人に向かって語るのではなく、神に向かって語ります。だれも理解できませんが、御霊によって奥義を語るのです。」ここから異言について 3 つのことが分かります。一つ目は異言は「人に向かってではなく、神に向かって語るものである」ということです。預言や説教は人に向かって語るものですが、異言は神に対して発される言葉です。ですからそれは祈りあるいは賛美の形を取るようになります。今日の箇所でもそのように表現されています。二つ目は「だれも理解できない」ということです。それは普通のことばではありませんでした。周りの人はそれを聞いて理解できないし、語る本人もそうだったかもしれません。三つ目はこれは御霊によるということです。ですから私たちはこれを否定したり、軽んじるべきではありません。コリント人たちはこの神秘的な御霊の賜物に熱狂したようです。そしてこれができる人は、その賜物を持っていることで自分を誇り、人々の集まりにおいて、礼拝において、これ見よがしに恍惚状態で話したようです。しかしそこにいる人々は誰も理解できません。こうしてコリント人たちの礼拝には大混乱が生じていました。

そんな彼らにパウロは前回、異言と預言を比較して語り、預言がまさると述べました。なぜそうかと言えば預言は教会を成長させるからということでした。4 節：「異言で語る人は自らを成長させますが、預言する人は教会を成長させます。」12 節：「同じようにあなたがたも、御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会を成長させるために、それが豊かに与えられるように求めなさい。」

このような内容を受けて今日の 13 節は「そういうわけで」と始まります。異言と預言を比べて預言がまさるとパウロは述べて来ましたから、異言は捨てるようにと語るかと思いきや、そうは言いません。13 節：「異言で語る人は、それを解き明かすことができるように祈りなさい。」つまり解き明かすことができれば異言は良いのです。その意味が明らかにされるなら、周りの人たちも聞いて理解できるなら、それは良い。それは預言と近いものになって来ます。ですから異言を語る人は解き明かすこ

とができる賜物も求めよと言われていました。パウロがこのように述べるということは、コリントでは異言が語られた後、解き明かしがなされてはいなかったということが分かります。異言を語る人はただ異言を語るだけ。人々の前でただ神秘的なパフォーマンスを示すだけ。そして私こそこれができる霊的な人間である！と人々は競い合っていたのでしょう。そんな彼らに解き明かしとセットでそれができるようになることを祈り求めよと言います。

解き明かすことは、14節のことばで言えば「知性」と関わります。パウロは14～15節で霊的体験と知性の関係について述べます。言いたいことはこの両方が大切であるということです。しばしばある人たちはキリスト教信仰においても、霊的であることと知的であることとは別である、あるいは相反するものであると考えます。パウロはそのような考え方に明白に反対しています。霊的であることと知的であることは両立すること、両立すべきことであると。ある人たちは異言によって興奮状態で神に祈り、それで満足していたのでしょう。4節に「異言で語る人は自らを成長させる」とあったように、確かにそれだけでも個人的に何らかの益があったのかもしれませんが。しかしそれだけでは知性は実を結びません。自分でも良く分からないが、とにかく素晴らしい霊的体験をした！神と親しい交わりをした！と思っけていても、知的面でそれはその人に何も加えていません。知性における進歩や成長はありません。神について果たして何を新しく知ったのか言葉で表現できません。それでは十分でないということです。霊的体験をしたというなら、それは知性においても実を結ぶものでなくてはならないということです。

そこでパウロは15節で「では、どうすればよいのでしょうか」と問い、「私は霊で祈り、知性でも祈りましょう」と言います。聖霊に導かれて霊的に祈ることはOKです。しかし知的にも祈れることを目指すべきであると彼は言います。何を祈ったのか自分でも分からない。でも神と親しく神秘的に交わった！と言って満足するのではなく、それを具体的な言葉で表せるように！その神との交わりを解き明かすことができるように！周りで聞く人が理解できる言葉で語るができるように！ということです。

それは賛美についても同じです。ある人は、私は霊で賛美していると言って知的側面を軽んじるかもしれません。ムードやメロディーやリズムに乗って感覚的に主を賛美し、満たされた！という体験をすることを重視し、歌詞の中身は二の次にする。そ

れで良いのではないということです。ここに「知性でも賛美しましょう」とあります。ですからその賛美は正しい歌詞を持っていることが必要ですし、また正しい神学が背後にしっかりあるものでなければならないということにもなります。もちろんこちらを強調し過ぎて逆の方向に振れて、ただ知的で誤りがなく正確な内容であれば良いわけではありません。やはり御霊に導かれて熱心に、心から、豊かな生ける交わりの中で賛美することが必要です。この両方のバランスが取れたものであるようにということのパウロは言っていると思われます。霊を重視する人は知性も劣らず重視するように。霊的体験は知性においても実を結ぶように。それを他の人々も理解できる言葉で言い表すことができるように。その賜物も聖霊に祈り求めるようにとされています。

16 節に、そうでないとあなたが霊において賛美しても他の人がどうしてアーメンと言えるでしょうかと言われます。ここに「初心者の席に着いている人は」と出て来ますが、これは誰のことでしょう。これは文字通り、礼拝の場所に「初心者の席」が設けられていたということではないと思います。特に当時は家の教会であったことを考えれば、なおさらそんな専用シートがあったとは考えにくいことです。これは礼拝の場にいる初心者の人という意味でしょう。またこの「初心者」とは誰でしょう。信仰に入って間もない人、あるいは求道者のことでしょうか。しかし異言による賛美を聞いて理解できず、アーメンと言えないのは、そういう意味での初心者ばかりではないと思います。長年信仰生活をしていても異言の賜物を与えられていない人、それを理解できない人は大勢いたと考えられます。初心者という言葉には印がついていて欄外に別訳として「異言の心得のない人は」とあります（第3版：異言を知らない人々）。ですからこれは異言に対して初心者である人、つまり異言を理解できない人、それを知らない人という意味であると思われます。そのような人々はアーメンと唱和することができません。アーメンとは、ご存知のように「その通りです」という意味の言葉です。異言を語る人が一人で悦に入って賛美しても、他の多くの人々は何を言っているのか分からないのですから、それにアーメンと唱和することができません。

17 節でパウロは「あなたが感謝するのはけっこうですが」と言います。その人たちが感謝しているということは分かっています。それはけっこうです。しかしそのことで他の人が育てられるわけではありません。他の人が建て上げられては行きません。礼拝は自分一人が恵まれれば良いというものではありません。エペソ人への手紙5章19節に「詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い、主に向かって心から賛美し、歌

いなさい。」とありますように、礼拝は神にささげるものであると同時に「互いに語る」という側面も持っています。そこに集められた人たちが礼拝プログラムの一つ一つを通して互いに語り、皆がともに恵みを受けることが大切であると言われています。この共同体的側面を大切に考える必要があるということです。礼拝は「私」対「神」というだけのものではないのです。神への礼拝において互いに語り、お互いの建て上げのために仕え合うことを私たちは願って行くべきなのです。

最後 18～19 節にはパウロの証しが述べられています。パウロはここで「私は、あなたがたのだれよりも多くの異言で語っていることを、神に感謝しています」と述べます。何とパウロも異言を語る人だったことがここから分かります。彼は決して異言を語れないから、異言について否定的なことを言っていたのではなかったのです。彼は異言を語ることができました。それどころか「だれよりも多くの異言で語っている」とさえ言います。他の箇所にはパウロが異言を語ったとは書かれていないので、私たちもここで初めてはっきり知ってびっくりします。もしかするとコリント人たちもそうだったかもしれません。この後見るようにパウロは公の場所では異言を語らなかったようです。ですからそのことを知らないコリント人は、自分たちの方がこの点でパウロより上だ！霊的な人間だ！と高ぶっていたかもしれません。ところがパウロはもっと多くの異言を語る人でした。彼はそのことで神に感謝していると言います。

しかしでした。19 節でパウロは言います。「しかし教会では、異言で一万のことばを語るよりむしろ、・・・私の知性で五つのことばを語りたいと思います。」パウロにとってその気なら異言で一万のことばを語るのは容易なこと、それは自然なことでした。しかし彼はそういう自分を抑制して五つの普通の言葉、皆に理解できる言葉を語ることに努めていると言います。ですから彼が話す五つのことばの背後には一万の異言のことばがある、それほどの思いがあるということになるのでしょうか。

なぜ彼はそうするのでしょう。それは「ほかの人たちにも教えるために」と彼は言います。つまり他の人々に益をもたらすため、その成長に仕えるためです。もし異言で話したら、これまで見て来た通り、周りにいる人々には通じません。ですから何の益にもつながりません。自分のためにはいいかもしれません。しかし他者が益を受けることを優先して願うならどうしたら良いでしょう。パウロは異言で一万のことばを語るのが自然である自分を抑えて五つの人々に通じる言葉を語ることに心を用いる

と言います。これは19節の最初にある通り「教会では」の話です。ですからプライベートな生活において異言を話すことは問題ありません。ということはパウロはプライベートな生活では多くの異言を話していたということなののでしょうか。18節で「だれよりも多くの異言で語っている」と彼は言っています。彼はこのことについて他の箇所では何も言わないので、私たちは知らなただけです。パウロにとって、それはひけらかすべき事柄ではありませんでした。そうしたところで他者に益を与えるわけではありません。そこで彼は言いませんでした。そんな彼でしたが、コリント人たちとのやり取りの中で思わぬ仕方で彼の私生活が垣間見えることとなりました。ここから私たちはパウロがいかにか皆の益を考えて、皆の集まりにおいて、自分を抑制していたかを思わされるのではないのでしょうか。彼にとって異言を話すことは極めて自然なことであり、特権あることでした。それは彼にとって祝福であり、栄えある賜物であり、彼の権利に属することでした。しかし彼は人々の集まりにおいては、それを後ろに置き、むしろ五つのことばに自らを押し込めたのです。そのように制限したのです。それは他者のため、他者の成長と益に仕えるためです。私たちはこのパウロの姿の背後にキリストの姿がダブって見えて来るのではないのでしょうか。

ピリピ人への手紙2章6～7節に「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じように」なられたこと、そして十字架の死にまで従われたことが記されています。まさにキリストはご自分の特権、栄光、権利、祝福を後ろに捨てて、このクリスマスの時、私たちのところに来てくださいました。そして仕えてくださいました。私たちの益のためにです。そのキリストに感謝して、自らの生き方において、キリストを映し出しているパウロの姿を私たちはここにも見るのではないのでしょうか。

私たちはどうでしょう。他者の益を優先して願って、進んで自分の特権を捨てるという生活をしているのでしょうか。兄弟姉妹を愛するがゆえに、また教会の成長のために、何かを喜んで後ろに捨て置く生活をしているのでしょうか。それともそのような考えは持たず、自分の権利や自由を主張して歩んでいるのでしょうか。自分の祝福、自分が恵まれること、自分が注目されること、自分の快感、自分の楽しみを優先して歩んでいるのでしょうか。しかしパウロは、彼が話せる一万の異言よりも、皆に益をもたらすことのできる五つのことばを話したいと言いました。このパウロの姿から私た

ちも教えられたいと思います。またそのパウロが倣ったキリストのお姿を仰ぎ、キリストに倣う者でありたいと思います。キリストは私たちの救いを心にかけて、すべての栄光と権利を後ろにかなぐり捨てて、この時私たちのところに来てくださいました。このキリストに感謝し、この方を受け入れて、私たちもこの方に倣う歩みへ導かれたいと思います。他者を益するために自分の特権や権利さえも喜んで放棄し、そうしてキリストと深く結ばれ、キリストに感謝し、キリストに栄光を帰す歩みへと導かれる者でありたいと願います。